OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Longitudinal Changes in Stress Responses, Stressors, and Social Supports Among Adolescent Students: A Latent Growth Curve Modeling Approach
Author(s)	古川, 美之
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105562
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　（古川美之）	
論文題名	Longitudinal changes in Stress Responses, Stressors, and Social Supports among adolescent students: A latent growth curve modeling approach （ウェブベースのストレスチェックによる、青少年のストレス反応・ストレッサー・ソーシャルサポートの高校3年間の縦断的変化の検討：潜在成長曲線モデルによる分析）

【背景】

世界保健機関（WHO）は、10～19 歳の青少年の 13%以上が精神疾患を抱えていると報告しており、若者のメンタルヘルスは世界的な公衆衛生上の重要課題である。思春期（10～19 歳）は、急速な身体的・心理的変化と社会適応要求の高まりを特徴とする時期であり、この時期に受けるストレッサー（ストレス要因）を受けた経験などは、生涯にわたって健康に影響を及ぼす（Paton et al., 2017）。一方で、友人や家族によるソーシャルサポート（社会的支援）は、ストレスの悪影響を緩衝する要因として重要である（Cohen S, 1985）。日本では成人向けのストレスチェック制度は整備されているが、青少年向けは存在していない。

【目的】

本研究の目的は、高校生の 3 年間の縦断的ストレスチェックデータに基づき、ストレス反応（stress responses: SR）、ストレッサー（stressors: ST）、ソーシャルサポート（social supports: SS）の 3 年間の変化と相互関係を明らかにすることである。

【方法】

本研究は倫理審査委員会の承認後、生徒およびその保護者からインフォームド・コンセント（同意）を得てから、実施された。高校 1 年生から 3 年生までの連続した 3 年間にわたり収集された高校生（n = 605）のデータを用いて、縦断的分析を行った。高校生は 3 年間、毎年 Web を通じて、パブリックヘルスリサーチセンター版ストレスチェックインベントリー（Public Health Research Foundation-Type Stress Inventory: PSI）による評価を受けた。この調査票は、SR、ST、および SS を評価する項目で構成されている。データは潜在成長曲線モデル（latent growth curve modelling: LGCM）を用いて分析された。

【結果】

LGCMによる分析の結果、ST（ストレッサー）の切片（1年次時点の水準）と傾きの双方が、3年次におけるより高いSR（ストレス反応）を有意に予測した（それぞれ β = 0.591 および 0.916; $p < .001$）。対照的に、SS（ソーシャルサポート）の切片（1年次時点の水準）は、3年次におけるSRの低さと有意に関連（予測）していた（β = -0.279, $p < .001$）。SSの下位尺度においては、「友人からのサポート」の切片が、3年次におけるSRの3つの下位尺度すべての低下を有意に予測した。各尺度の結果は、抑うつ・不安（β = -0.248, $p < .001$）、不機嫌・怒り（β = -0.254, $p < .05$）、無力感（β = -0.223, $p < .001$）であった。

【考察】

本研究は、高校生のストレス状態を縦断的に測定し、ストレス反応（SR）、ストレッサー(ST)、ソーシャルサポート(SS)の関係を縦断的視点で検証することができた。ストレスチェックの実施により、高校1年時の初期段階でのストレス状態の把握と、早期にソーシャルサポートを提供することの重要性が示唆された。研究の限界としては、参加者を地域・学力・学校の種類などで層別化できていない点などがあげられ、それらの点に留意して、今後、大規模な長期的な研究を必要としている。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　古川美之　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主 査　教授	片山　泰一
	副 査　准教授	藤野　陽生
	副 査　教授	平野　好幸

論文審査の結果の要旨

本学位論文は，高校生の3年間の縦断的ストレスチェックデータに基づき、ストレス反応（stress responses: SR）、ストレッサー（stressors: ST）、ソーシャルサポート（social supports: SS）の3年間の変化と相互関係を明らかにすることを目的としている。高校1年生から3年生までの連続した3年間にわたり収集された高校生（n = 605）のデータを用いて、縦断的分析を行った。高校生は3年間、毎年Webを通じて、パブリックヘルスリサーチセンター版ストレスチェックインベントリー（Public Health Research Foundation-Type Stress Inventory: PSI）による評価を受けた。この調査票は、SR、ST、およびSSを評価する項目で構成されている。データは潜在成長曲線モデル（latent growth curve modelling: LGCM）を用いて分析された。その結果，LGCMによる分析の結果、ST（ストレッサー）の切片（1年次時点の水準）と傾きの双方が、3年次におけるより高いSR（ストレス反応）を有意に予測した（それぞれ β = 0.591 および 0.916; $p < .001$）。対照的に、SS（ソーシャルサポート）の切片（1年次時点の水準）は、3年次におけるSRの低さと有意に関連（予測）していた（β = -0.279, $p < .001$）。SSの下位尺度においては、「友人からのサポート」の切片が、3年次におけるSRの3つの下位尺度すべての低下を有意に予測した。各尺度の結果は、抑うつ・不安（β = -0.248, $p < .001$）、不機嫌・怒り（β = -0.254, $p < .05$）、無力感（β = -0.223, $p < .001$）であった。これらの結果から，高校生のストレス状態を縦断的に測定し、ストレス反応（SR）、ストレッサー(ST)、ソーシャルサポート(SS)の関係を縦断的視点で検証することができた。

すなわち、本研究の新規性は第一に、思春期の学校生活におけるストレス関連要因を、横断研究ではなく縦断データに基づき統計学的に厳密に解析した点にある。特に、ストレッサーの初期水準および増加傾向が、3年後のストレス反応を強く予測する一方で、ソーシャルサポート、とりわけ友人からの支援の初期水準およびその増加が、抑うつ・不安、易怒性、無力感といった複数のストレス反応を有意に軽減することを明らかにした点は重要である。これは、従来理論的に指摘されてきた「ソーシャルサポートのストレス緩衝効果」を、学校現場における縦断データで実証した点で高く評価される。

第二に、学業ストレスや進路ストレスといった具体的な学校ストレッサーが、無力感を中心とするストレス反応の発達的変化にどのように関与するかを明確に示し、思春期後期におけるメンタルヘルス支援の重点領域を実証的に提示した点も学術的意義が大きい。さらに、性別を共変量として組み込むことで、女子およびジェンダー多様な生徒における心理的脆弱性の高さにも言及しており、包括的支援の必要性を示唆している。

以上より、本研究は、ストレスチェックシステムの構築と縦断的データ収集を通じて、思春期が抱える課題を継続的に解析・考察した点で貴重な研究であり、今後の実装展開も期待される。その内容から、思春期のメンタルヘルスにおける一次予防のための「子どものWebストレスチェック」によって、高校生のストレス状態を把握でき、高ストレス者の抱えるストレッサーへの対処やソーシャルサポートの増強のような1年次からの早期介入の重要性を示唆する価値ある成果であり、博士（小児発達学）の学位授与に値すると判断した。